

2日目  
第四部

大学教育改革研修  
「これからの大手前大学」  
-C-PLATSを座標軸に据えて-

Action & Social Responsibility

平成23年3月11日(金)  
於・シーサイドホテル舞子ビラ神戸



石毛 弓 先生

に貢献することが社会的席印を果たすことであるという強い意思を養成する

到達基準：3 物事を社会的責任の観点で判断し行動できる\*1

分科会メンバー

- |     |       |       |       |
|-----|-------|-------|-------|
| ●教員 | 石毛 弓  | 伊藤 博  | 川島 正章 |
|     | 仲野 好重 | 二階堂達郎 | 久木 一直 |
|     | 廣田 政生 | 松井 博司 | 藤田 昌弘 |
|     | 芳田 茂樹 |       |       |
| ●職員 | 大上 容一 | 伊藤 寛士 | 坂本 俊平 |
|     | 高田奈津子 | 小森 肇  |       |

1. Social Responsibility

1.1 概念

定義：社会的責任を果たす必要性を理解し、自らの人生の理念によって社会に貢献しようとする意志

能力開発の概要：社会理念と個人理念を調和させ、社会

第3班では大手前大学の学生の姿を念頭におき、まず上記のSocial Responsibilityコンセプトを端的に言い換えるかどうかを考えた。そして、「マナーを身につける」、「身につける必要性を理解する」の二点になるのではないかといった結論づけました。この共通理解を土台にし、授業実践としてどういうことができるか、またしているかについて話し合いました。

一点確認しておきますと、このSocial Responsibilityはほかの9つのコンピテンシーとは違った位置づけになります。C-PLATSの定義において、他のコンピテンシーは身につける「能力」ですが、これだけは「意思」となっているからです。この点も含めてこのコンピテンシーをどう解釈し、どう実践してゆくべきかということが議論の俎上に載せられました。

先にお断りしますが、各分科会では与えられたテーマを「コア教育科目」と「専門科目」に分けて考察するようにという問題設定がなされていました。しかし話し合ううちに、Social Responsibilityについては分けて考えることが重要ではないという結論になりましたので、「授業」というひとくくりで紹介いたします。また、主として初年次生向けの科目を対象に議論いたしました。

1.2 マナー

「マナー」について、授業実践あるいは提案というかたちで意見交換した結果を次のようにまとめました。結論としては、社会的責任の必要性を、押しつけてはく他人との



価値観のぶつかり合いと共有によって育てられないかということになりました。

#### ●実践「契約書の作成」

初年次生向けの100番台トライアル科目(受講生100名以上)の講義において、「授業で守るべきルール」および自分はどうしたいかという「質問項目」を設けた誓約書を作成し、学生に配布。学生が誓約書にサインをして提出することで、教員・学生間でルールの共通理解がなされた。結果として授業の秩序が円滑に保たれるようになった。

#### ●実践「共通の価値観」

ある私語の多いクラスで、「なぜこんなに私語が多いのか」をテーマにディスカッションを行った。次の時間以降、学生たちが自主的に口をつぐむようになった。一般的な決まりごと以外にも、お互い気持ちよく授業を受けるために必要かを話し合わせ、自分たちが守るべきルールを自分たち自身で作らせた。つまり学生の間に共通の価値観を育てる作業を行った。

#### ●提案「オリエンテーションの徹底」

授業第一回目で、授業ルールを明確に定め学生に伝える。これを厳密に行うことで、自己責任のあり方を学生に問い直させる機会になるのではないかと(教員と学生間での共通のルール・価値観づくりの提案)。

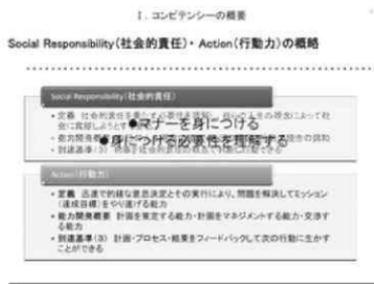
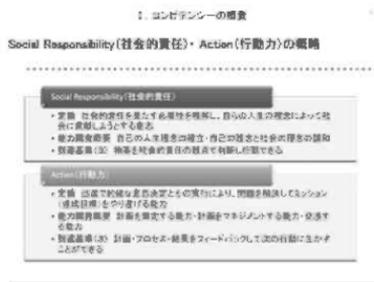
### 1.3 自己肯定感

大手前大学に入学してくる学生は、何らかの挫折感を抱いている場合が多い。なかには、小学生くらいから続いている根強い場合もある。これを前提として、自己否定感をやわらげ自己肯定感を育てることが、入学した最初になされるべきではないかという意見が出ました。この点について、とくに資料として提出されたキャリアデザインⅠ～Ⅳのモデルプランを基に話し合いました。

どんなにいいカリキュラムを実施しても、受け取る側が不安定であればその効果は半減する。だから入学直後に、必修科目において自己肯定感を高めるプログラムを実施してほしいという要望です。また、これは授業内だけでなく授業外においてもさまざまな実行できることだと考えています。

#### ●提案「時期」

キャリアデザイン第1～3週での授業において、仲間を作ったり大学にきた意味を肯定的にとらえる取り組みを実施できないか。ゴールデンウィークに入る前までに、自己肯定感を高くクラス作りができるプログラムを取り入れられないか。



#### ●提案「大学生としての自覚」

生徒を大学生として扱うことを意識する。サポートすべき部分と自立させる部分の線引きをして、一個の人間として扱うことを忘れないようにする。

#### ●提案「共感」

先輩やクラスメイトの体験を知ることで共感をはぐくみ、同時に身近なキャリアモデルとする。自分でもできるかもし



ところ、「先生が名前を覚えてくれる授業」という答えが返ってきたということです。褒められるときも注意されるときも、個人としてみられていると思うと緊張感ができる。個人として教員と接しようという気持ちをうながす要因になる。名前を呼ぶのは大事だということです。

学生と大学や、学生と教職員との信頼関係があってこそ、学生側に責任感や尊重の念が育っていくのではないでしょう。人間関係ができていなかったり、信頼関係がないところでSocial Responsibilityを感じるというたり、マナーやモラル、ルールを守れといっても有効ではない。また守ったとしても型どおりでしかなく、必要性を理解した上での行為とはならない。そうしないためにも、学生一人ひとりを個人としてあつかうことが重要であるという結論になりました。

信頼関係は、教職員と学生のあいだだけでなく学生間でも必要です。たとえばフレッシュマンセミナーは少人数制・通年科目ですが、それに関わらずある学生は、クラス内に名前を知らなかったり一度も話したことがないクラスメイトがいたといいます。それではクラス内での信頼関係を築いたり居心地をよくすることは難しいでしょう。クラスメイトは単に横に座っている誰かではなく、顔と名前とそれまでの人生をもった一人の人間です。そのことに気づかせる機会があれば、Social Responsibilityの前段階としてのモラルやマナーの気づきに役立つのではないのでしょうか。

## 2. Action

### 2.1 概念

定義：迅速で的確な意思決定とその実行により、問題を解決してミッション(達成目標)をやり遂げる能力  
能力開発概要：アクションプランを策定する能力、プロジェクトマネジメント能力、ネゴシエーション能力  
到達基準：3 自己の行動計画、行動プロセス、行動結果をフィードバックして次の行動に生かすことができる

れないと思わせることで、自己肯定感を育成する。

#### 1.4 学生を「個人」としてあつかう

次に、先ほどの自己肯定感にもつながりますが、学生を集団でなく個人として扱うという点が話し合われました。その実践例として、学生を名前で呼ぶことなどが紹介されました。ある先生が、「おもしろい授業や、ちゃんと受けなければならぬ授業ってどんなものだと思う?」と学生に尋ねた

にイメージされる「行動力」とは違うのではないかということになりました。

行動を起こすためには、モチベーションをもつことや実行に向けて一歩踏み出す力などがまず必要でしょう。しかしこういった点を、Actionの定義なり概要なり到達基準などのどこに盛り込めばいいのかが、この分科会ではわからなかった。また、問題解決のために学生自らが行動を計画して実行できれば問題はありません。しかし計画しよう・実行しようという意思そのものをはぐくむことに、おそらく現在大学の教職員は苦労している。だからActionの定義のなかに、まず計画し実行できるようになるためにはどうすればいいかを盛り込むべきではないかという話になりました。

## 2.2 PBL型授業

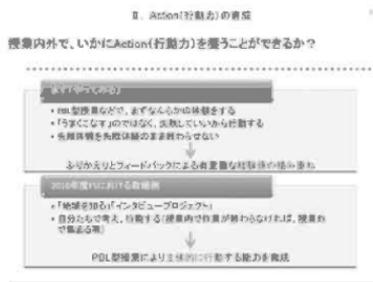
Actionについては、Social Responsibilityのときのような具体案はあまり出ませんでした。定義そのものへの疑問があったからです。とはいえそのなかで、行動力についてやPBL型授業に関して話した内容を報告します。

なににせよ、まず学生が「やってみる」ことが大事であるという点で意見が一致しました。課題をうまくこなすことが重要なのではなく、むしろやってみて、失敗し、そこから何を学びとるかが重要です。もちろん、失敗体験を失敗体験のまま終わらせない仕かけは必要です。実行とふり返りとフィードバックによって、失敗体験を有意義なものにしてゆく。これを積み重ねることで、行動することへのためらいや恐れを軽減させてゆきたいと考えました。PBL型授業の事例としては、2010年度のフレッシュマンセミナーで行われた「阪神間の地域を知る」や「インタビュープロジェクト」などが挙げられました。

## 2.3 社会を知る

自ら行動を起こすために、学生は社会をもっと知るべきでしょう。キャリアデザインのモデルプランに「新聞を読む」という項目があります。どのように実践されるかはまだわかりませんが、新聞に目を通し、自分でテーマを設定し、その問題について話し合うことで、外への目を養っていけないかという案が出ました。

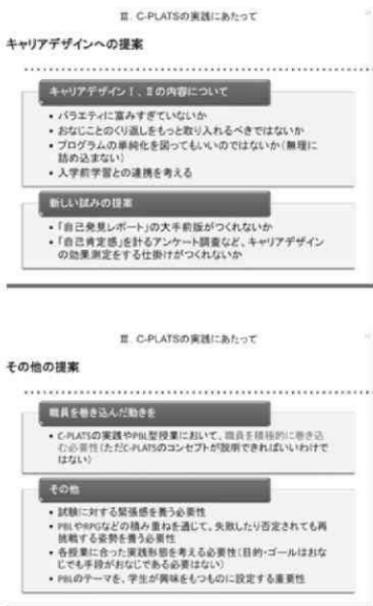
ある先生の実践報告によると、マンガ家になりたい学生が多いクラスで「東京都青少年健全育成条例改正案」について書かれた新聞記事が討論のテーマになった。するとこの問題に関して、学生たちは本当に熱心に話し合っていたということです。自分が将来マンガ家になったとき直面する問題だと自覚したら、ここまで一所懸命話し合えるの



かと、その先生は感心しておられました。

新聞記事が難しだとか、とっつきにくいという学生もいるでしょう。しかし記事の内容と自分のキャリアデザインが結びつけば自ずと真剣に読むでしょう、そんなふうには社会に目を向ける機会を早いうちから養うべきでしょう。それがひいてはActionの育成につながるのではないかと考えます。

さらに、社会を知ることで社会への否定的な感覚をやわ



らげてほしいという意見がありました。ニュースなどを見ましても、悲しかったりつらい報道が目につき、「社会に出たって、しんどいことしかないんじゃないか」と学生が思うというような内容が多い。しかし現状を把握して情報を読み解き、否定的な面以外にも視野を広げるとはいえつです。自己を肯定することで社会を肯定し、社会を肯定することで社会情勢をポジティブな視点でとらえることができるようにもっていけないか。加えて、社会に肯定感を持つということは、社会への参加に対して前向きになれるということの意味するでしょう。この点から、積極的な就職活動にもつなげられないかという意見がでました。

また学外体験として、課外活動の充実の必要性が強調されました。課外活動は仲間や居場所づくりにつながり、利害関係を越えた関係を構築できますし、場合によっては学外の人間との接触をもつことができます。この、いわば「体で覚える社会人基礎力」を、課外活動の場から生み出してゆこうというものです。これは学生の自信づくりにもつながるでしょう。

いま「自信づくり」といいましたが、それでも自分に対してポジティブにできない学生もいるといいます。あるクラブのキャプテンを務めていた学生が、就職活動でそのことをアピールしなかった。理由を訊ねたところ、キャプテンをしていたら能力が高いと思われるさまざまな仕事を任せられるかもしれない、「できる」と言えない自信のなさを表れてでしょう。このような事例からも、学生の自信づくりにつながるプログラムの必要性を感じました。

### 3. その他の提案

ここまでSocial ResponsibilityとActionについて話してきました。しかし議論のなかで、これら二項目におさまらない話もたくさん出ました。最後に、それらについて述べさせていただきます。

#### 3.1 授業実践の共有化と研修の必要性について

今後、本学ではPBL型授業を実践するようにと推奨されています。しかし、すでに実施している科目もけっこうあるという声もききます。そうなりますと、PBL型授業の実施に関する情報の共有がまだ不十分なのかも考えられます。これはPBL型授業のケースだけに限りませんが、授業内容などの情報をもっと共有化できれば、さらにレベルの高い議論が可能になるのではないのでしょうか。またコア教育科目について、これまでの授業実践の学内共有と検証がなされるべきだと意見がありました。

#### 3.2 C-PLATSのコンセプトについて

C-PLATSという点からは、2010年度版C-PLATSの結果の検討と、その結果が2011年度版のC-PLATSにおいてどのように応用されるのかの検証が求められました。また2011年度のディクショナリーは、初年次生が本当に理解できる内容か。本学の学生像に合った内容になっているのか。さらに、教職員が学生から質問されたときにプレなく説明できるのかなどの疑問が呈されました。

上記に加えて、高校訪問を考えたさい、これが高校生に理解できる内容か。高校の先生に説明し、先生から高校生にわかりやすく伝えてもらえる内容であるかという懸念も出ました。これは2011年度のディクショナリーを否定するというのではなく、大人向けのしっかりしたものはそれとして、もう少しとつきやすい解説を今後考えていく必要があるのではないかということです。本学に入学するかもしれない高校生へのアピール力という観点から、内容を見直してもい

いのではないかと提案になります。

### 3.3 キャリアデザインについて

今回提出された、キャリアデザインのモデルプランについて話します。まず、バラエティに富みすぎていないかという指摘がありました。多くのことを一度に学ばせるより、テーマを絞って、同じことを繰り返させることで力をつけさせられないかという意見です。また、入学前学習との連動を視野に入れて欲しいとも考えております。

新しい試みの提案としては、昨年度まで初年次生に対して「自己発見レポート」を実施していましたが、これは既製の教材を使っていました。しかし、大手前大学独自のものが作れないか。また自己肯定感を測るアンケートなどをキャリアデザインで実施できないかという希望が出されました。

最後の提案として、「職員の方々を巻き込んだ動きがぜひほしい」「どうすれば教職員の協働体制がつけられるかを、真剣に考えるべきである」との要望が出ました。先ほど教職員がC-PLATSの内容を説明できるかという指摘をしましたが、ただ機械的に説明できればいいものではありません。これは職員も教員も同じです。共通理解のためには、勉強する機会や時間などが必要となります。大学側に、ぜひ積極的にそのような機会を設けてほしいとの意見がありました。

今回ご報告した点をもう一度簡単にまとめますと、Social Responsibilityにおいて重要なことは、「価値観の共有」と「自己肯定感の育成」です。Actionは「やってみることの重要性」および「授業内はもちろん授業外に出ていくことの重要性」となります。そのほかに出た意見では、「授業実践の共有化と検証」と「学生が理解できるC-PLATSの解説」が今後の課題として提起されました。

第3班からの報告は以上になります。ご清聴どうもありがとうございました。

※1 第3班では、全学生が卒業時に習得しているべき到達基準を「レベル3」に設定し話し合った。

原 菜々希

これからC-PLATSを推進していく上で大切なこと

---

Social Responsibilityの社会的責任に即して実践のこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>価値観の共有</li> <li>自己肯定感の育成</li> </ul>
Action(行動力)において重要なこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>「やってみることの重要性」</li> <li>授業内はもちろん授業外に出ていく重要性</li> </ul>
その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>授業実践の共有化と検証</li> <li>学生が理解できるC-PLATSの解説とは</li> </ul>

---

夜遅くまで話し  
さまざまな意見を交換し合った  
第3班のメンバー一同に  
御礼申し上げます

